

ホップの香りとモダンなムード漂う

狸小路のビアホール

ビールのメッカ札幌にふさわしく、多くの店が軒を連ねた狸小路のビアホールを紹介します。

冷たいビールで渴いたのどを潤し、仲間と楽しく語らう憩いの場、ビアホールが札幌に初めて登場したのは明治四十三年（一九一〇年）のこと。この年、狸小路三丁目で焼き芋と氷水を売る店を営んでいた安田栄次郎が、転業して「安田ビアホール」を開店しました。

当時の様子について、昭和九年の「朝日新聞」に回顧談が掲載されています。それによると、札幌農学校の生徒で、コップ七十杯も飲んだ猛者がいたとか。また、理容店（バーバー）と間違えて入った客や「ビアホールを一杯くれ」と注文した客もいたというので、当時は、よほどビアホールが珍しかったようです。

安田ビアホールに続き、大正三年（一九一四年）には、二丁目に現在もあるサッポロビール直営のビ



狸小路3丁目から東を望む大きなビール瓶型の広告塔が安田ビアホール
「札幌市教育委員会文化資料室所蔵」



サッポロビール直営店
「札幌市教育委員会文化資料室所蔵」

アホールが開店しました。ウエートレスが首からかばんを下げ、ホールで食券を売りさばいた話は後々までの語り草となりました。このころのビールの値段はコップ一杯五銭。米十キが八十九銭、豚肉百^キが四銭八厘の時代でした。

その後、四丁目にも朱色の五重塔が目を引きつけたサクラビールの直営店が開店するなど、狸小路には、さまざまなビアホールがひしめき合いました。こうして、ホップの芳香とモダンな雰囲気、多

くの人を魅了し、次第に市民生活の中に浸透したビアホールは、今も身近な交流の場となっています。

(平成十二年七月号・第六十九回)